
雨上がり 初夏の想い

三沢緋夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨上がり 初夏の想い

【Zコード】

N5125A

【作者名】

三沢緋夏

【あらすじ】

涼はサッカーが大好きな幼馴染の廉が好き。梅雨明けの空の下、2人は近所の広場でサッカーをし始めますが・・・

連日降り続いた雨が止んだ。

バケツをひっくり返したように降っていた雨が止んだ。

空は切り裂いたように青空が雲と交互に広がる。

その片隅に小さく

七色の虹が空の端っこを染めた。

「廉！ 雨止んだよー！」

窓を覗いていた涼はベッドに身を放り投げて寝ている男に声をかけた。何度もそうしているうちに、ゆっくりと廉は顔をあげる。

小学生のくせに髪は薄い茶色。左耳には空色の丸いピアス。耳は切れ長で、だるそうに開けられた耳は光を反射させて輝く琥珀色。きゅっと結ばれた口からは2度と言葉は出てこないような感じだ。その口から発せられる声は小学生とは思えないほどの高さで心地よく耳に残る。

「・・・・何？」

「あーもーだからっ！ 外っ。雨止んだのー！ サッカーしよーよ」
しばらくぼーっと夢の余韻にひたっていた廉は、やがてきょとんと目を丸くして窓の外を見た。

あんなに降っていた雨の名残はなく、今は晴れ渡る青空が見えるだけだ。その端っこにある虹を見つけて、廉はフと微笑んだ。

（あ・・・廉が笑ってる・・・）

廉の行動を一部始終見ていた涼は、耳を細めて窓の外を見ている廉を見て頬を染めた。

涼が“恋”という言葉を知ったのは幼稚園のときだ。いつも外で楽しそうにサッカーをしている幼馴染の廉に惹かれた。あれからもう

5年とちょっと。涼の想いに廉は気づかない。言つてないから当たり前なのだが。

「涼、サッカーしようか」

しばらく窓の外を眺めていた廉は、くるりと振り返つて涼に言つた。昔は「口口口表情をえていたのに、今はムスつとした、不機嫌そな表情しかしない。それでもサッカーをするときだけは今も笑顔が浮かぶ。その笑顔が、涼は大好きだ。

「だからしょーって言つたじゃんか」

そう言つて、サッカーボールを片手に涼は玄関から外に飛び出した。

雨上がり特有の、湿つたにおいが空気を漂う。それに重ねるように、お日様の暖かい香りがする。地面はまだ湿つているが水溜りはもうない。

コンクリートで固められた地面を走つて、高いフェンスで囲まれた広場に足を踏み入れる。

雨上がりだからか、広場に人影は見えない。その隅っこに置かれたサッカーゴールに向かつて、涼はボールをけりながら走り出した。それが合図かのように廉も涼を追つて走り出す。

ボールだけを見つめて、涼が蹴つて走り出す。それを奪おうと左右に動きながら涼に近づく。

「うわつと・・・」

ボールを狙う廉に思わず驚きの声をあげて、涼はまたにっこりと笑つてゴールに向かつて走る。廉はそれを追いかけて、タイミングを狙つてボールを奪おうとする。

初夏特有の蒸し暑さを忘れて、2人はただ一心にボールを追いかけた。

「はあつはあつつかつれたあ・・・」

涼が肩を上下に揺らして呼吸をするのを見ながら、廉はすっかり乾いた地面に座り込んだ。

その横に涼も腰を下ろして、空を見上げた。

いつのまにか雲も虹も消えていて、ただ不気味なぐらい青い空だけが瞳に映る。

しばらくそうしていたが、突然廉は立ち上がって、フェンスに向かつて走り出した。

「廉？」

涼の呼びかけはむなしく氣の早い蝉の鳴き声にかき消され、廉はどんどん遠ざかっていった。

フェンスまで行くと、廉はフェンス越しに誰かと話している。胸がチクリと痛む。

廉より少し濃い茶色の髪は肩甲骨より長く、頭には桜色のヘアバンド。肌は貴石の輝きで、強い日差しを綺麗に反射させている。白く細い指を時々形のいい唇にもつていいき、嫌気のしない程度の笑みを隠す。桃の花をそのままの色で染みこませたようなワンピースを着て、胸元には銀細工のペンドント。

フェンス越しに話している廉と先の少女は、親しそうに話している。それだけでも心が壊れそうなのに、時々聞こえる笑い声がさりに涼の胸に爪をたてる。

彼女。

そう言つて廉が紹介してきた、同じ学年の女の子。

心が刻まれていくような感じがした。

廉にとつて涼は所詮、幼馴染。恋の対象ではなく、サッカー仲間。嬉しそうに、楽しそうに。

フェンス越しにしゃべっている2人を見ながら

涼は日の光に溶かされていくような

そんな感覚を味わつた。

(後書き)

「エビエビエビ」でしたでしょうか・・・
思いつきで書いてしまったためにまとまりのない話になってしまい
ましたが・・・読みにくくてスマセン。精進します。
感想等いただけると嬉しいです。
縁があればまた。三沢でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5125a/>

雨上がり 初夏の想い

2011年1月5日14時33分発行